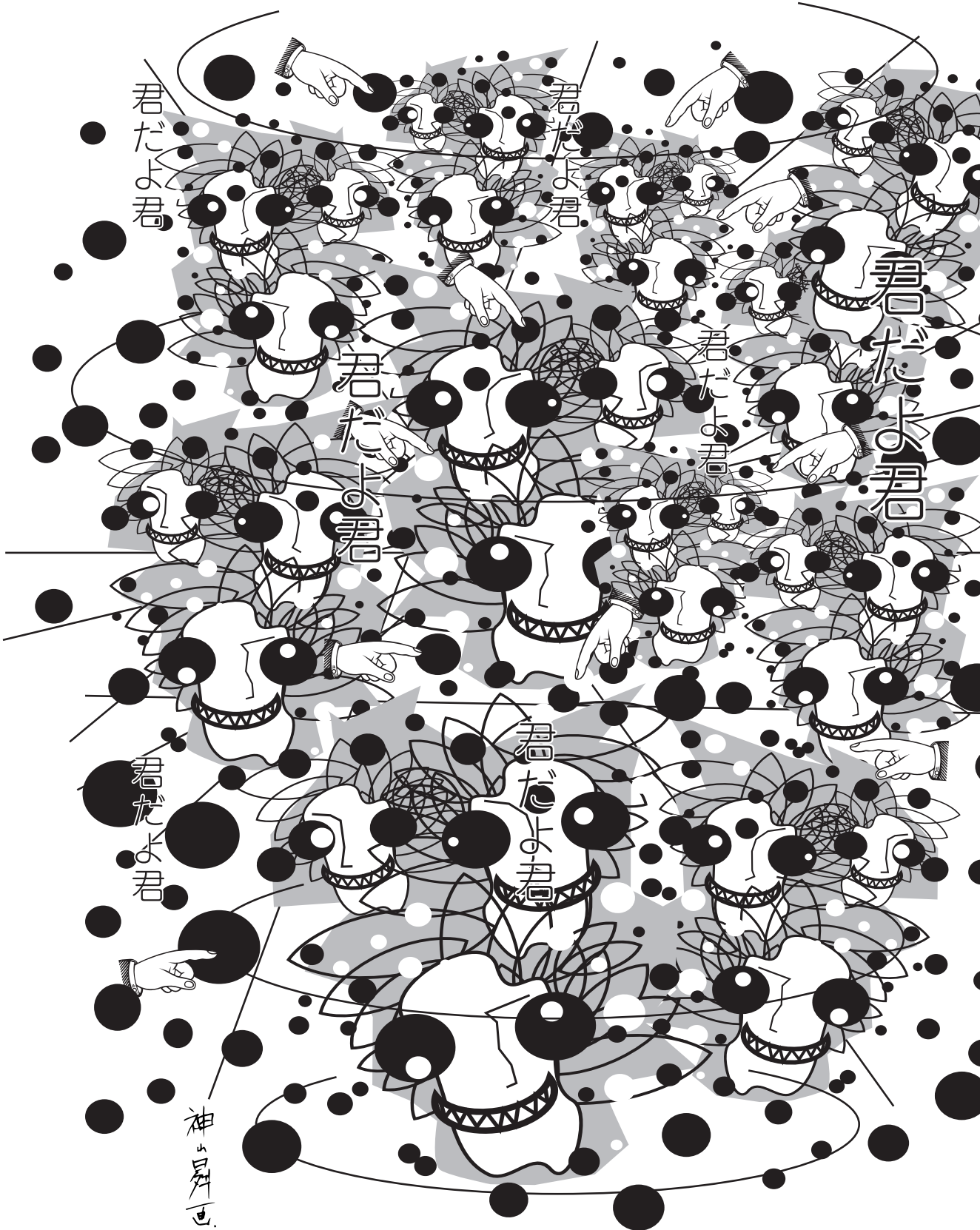


瞬刊ハイ口

2009・5・15

63



名残惜、ハイ口渋谷アピア最終上映会。

君だよ君

君だよ君

君だよ君

君だよ君

君だよ君

君だよ君

君だよ君

神島昇世

今日のパッケージ

午後10時～

フリースペース

大房さん

ハイロの上映会は、誰のどんな作品でも上映する、上映後に作品について観客と共に語り合う、をテーマに生まれて続いてきた。

まず、『シネマフェスト』があった。観客と作者がもう少し深く語るためには、企画上映もしようということになった。その流れで生まれたのが、『フリースペース』。

「街を歩いていたら、映画を上映する空間があった、ちょっと寄ってみた。」とか、「フィルムを持っていたから、上映してみた。」というような、日常の感覚に近い上映会をやろうというテーマで1980年ごろから始まった。

80年代の後半は『フリースペース』だけで毎月開催していたこともある、いわば『シネマフェスト』に続く由緒あるコーナー。

言ってみればハイロの精神ここにありで、まな板に乗る覚悟のある者、来い来い。他で認められない変人、来い来い。まだ見ぬ作者、来い来い。なのだ。

(応募は希望日の2週間前までに)

junofusa@kt.rim.or.jp または dodonga2-5-5@hotmail.co.jp

大房さん プロフィール

本名大房潤一（おおふさじゅんいち）。映像ディレクター/VJ/大学講師
80年代にビデオアートのことをはじめて以来、映像業界に居る。

90年頃よりハイロ代表になり細々とフリースペースを運営していたが、いろいろなメンバーが増えて活動も活発になったので今は事務局長的役割。会計や連絡係、Web運営などをやっています。

今月の参加作品

『雫がおちて、ここは瓦礫になる』タケヒロ雄太 DV 15分

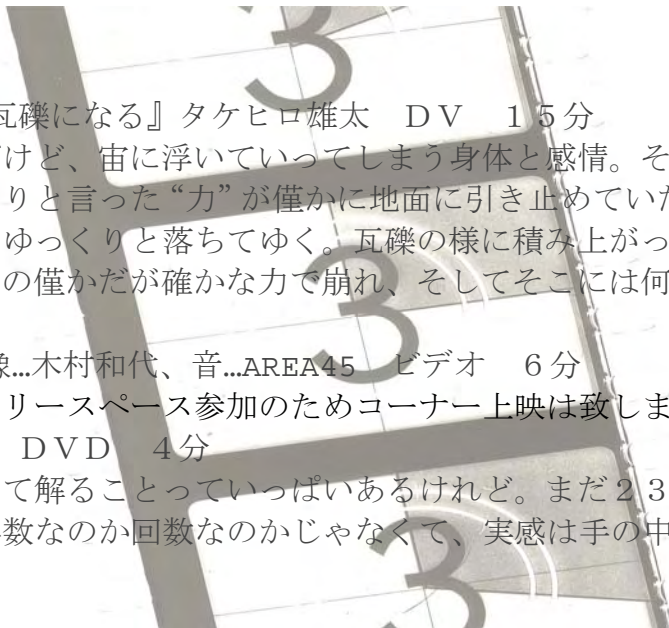
日々少しずつだけど、宙に浮いていってしまう身体と感情。それを人との出会いや温もりと言った“力”が僅かに地面に引き止めていたりする。一粒一粒の雫がゆっくりと落ちてゆく。瓦礫の様に積み上がったものたちは、やがてその僅かだが確かな力で崩れ、そしてそこには何が残るのか？

『contact c』映像...木村和代、音...AREA45 ビデオ 6分

今回、木村はフリースペース参加のためコーナー上映は致しません。

『肌色の砂』柴田容子 DVD 4分

育ててみて初めて解ることっていっぱいあるけれど。まだ23回しかたっていない。年数なのか回数なのかじゃなくて、実感は手の中に。



『東京の青』川本直人 8ミリ 10分

空と海の青に囲まれて育った。昔から青が好きだった。上京してしばらく、空も海もない東京にも好きな青を見つける。地元の青と、東京で見つけた青との違い。その違いに東京での自分のあり方を探る。

『探し物』山本英貴 8ミリ 10分

今回初めて映画を作りました。いつも学校をさまようという自分の奇妙な行動を表現したいと思い撮影しました。

『後ろ影が聞こえる』ほしのあきら・横溝千夏 8ミリ 24分

フィルムはモノだ。だから手づくりだ。映画はファンタジーだ。バーチャルなんかじゃない。作品は生き物だ。器なんかじゃない。・・・みたいなのよね。だから、きっとロマンチック好き。去年の自称傑作。



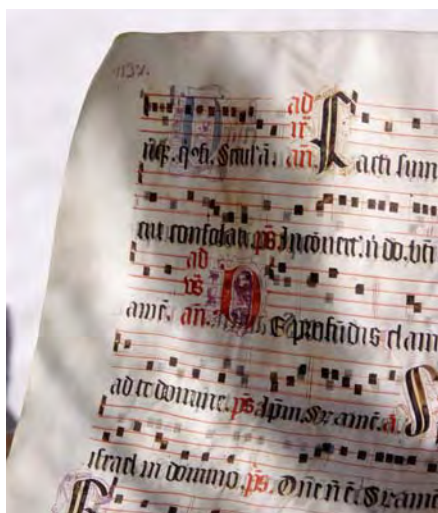
午後11時40分～

フィルムピクニック

スナミマコト

フィルムピクニックはお客さんに16ミリフィルムを渡して、何かやってもらうコーナーです。何かやってみよう！です。やってみて上手くいかなくてもいいじゃない。悔しくなったらもう一回。上手くいったらもう一回。ちなみにフィルムは高いんです。高いフィルムがタダで貰えるんだから、お得ってもんです。5月は紹介も兼ねて、僕が今までやったものと、今回やった何かを一緒上映します。ぜひご参加下さい。前にフィルムを貰った人で、今日上映する人は始まる前に、フィルムを持って来て下さい。(お相手 鈴木所長)

スナミマコト プロフィール
本名角南誠 (すなみまこと)。
15日まれ。岡山県出身。絵をたたが、デビッド・リンチを見なる。しかし大学に入って実験知り、お金が無くても映画を作うになる。そして始めたのが、画を作る方法。でも奥の深さに巨匠はいるはで、毎回あたふたに漫画も描いています。北冬書房中です。



1982年生8月
描くのが好きだっ
て映画を作りたい
映画というものを
る方法を考えるよ
カメラを使わず映
びびっくりするやら、
しています。因み
より「幻燈」発売

午前0時20分～

特別コーナー あなたが証人

☆のあきら、大房さん



明日の作家になる・・・かも知れない。

これで終わり・・・かも知れない。

作品になる可能性を秘めた短編を見て、話しを聞いて、

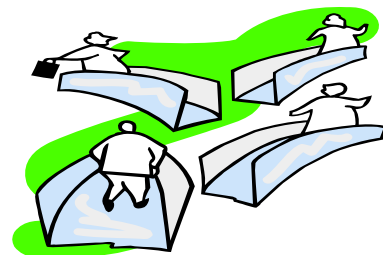
その感想が、当たるか当たらないか・・・さあ、さあ、

参加者（順不同）アイアム美奈子、ナキムッシ田中、ハゼて室井、裸足のマヤ

午前1時00分～

リニューアルコーナー 出張クラブ

マエダシゲル



「肉体クラブ」から「出張クラブ」となりました。
映画を作りたい。でも仕事から長距離出張が多く、幼子三人を養うサラリーマンの私には、既成の方法によっては映画は作れない。

「出張クラブ」、それは出張先でカメラを廻す。子どもと散歩しながら撮影する。（しかも子どもは撮らない）など、自分の生活の環境循環の中で映画を作ることの積み重ねていったことでたどり着いた、普遍的な日常映画です。

25年前にハイロの特別企画に「働きながら映画を作っている人達」という特集がありました。そういうジャンルの映画があるわけではありません。ただ、商業映画やTVでなく、なにものにも縛られず自由に映画を作る社会人がいた。そして高校生が、大学生もいた。映画作品そのものより、そういう人たちがいることが驚きでした。

私も映画が作れる。

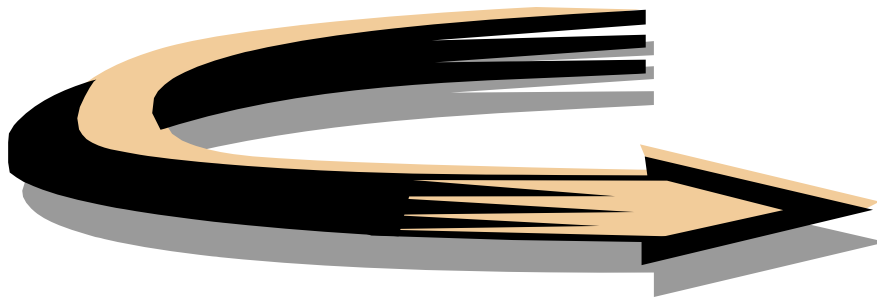
個人映画とは、そういう人達を作る映画のことだと、実は今も信じています。
5月。桜の枯れた花びらの遊歩道をオープニングに、たんぽぽの綿毛を撮りました。また、たんぽぽを撮ったのと思う方もいるかもしれませんが、綿毛と一緒に旅に出ようという思いと、どこにでも咲いているたんぽぽは、見知らぬ土地と故郷をつなぐ風景であります。綿毛の撮影を重ねるうちに、私の中の風景になりました。そう自覚した5月でもありました。（お相手 ほしのあきら、鈴木所長）

マエダシゲル プロフィール

本名：前田茂（まえだしげる）。 クリスチャンネーム：ヨゼフ（キリストの父）
横浜生まれ。立川育ち。八王子在住。本籍鹿児島。東は札幌、西は鹿児島、石垣島まで

ハイエースで横断したのが自慢。映画とSFが好きなのにプロレスの興味がいまひとつというジंकス破りな奴。東京映像芸術学院卒業。三児の父。48歳。

長い休憩です♪



お待たせです♪

午前2時00分～

心動交差点～あわせる気持ち～

シャーマン木村

洗濯機の上の棚に8ミリフィルムのビューワーが置いてあって、洗濯する度にそこに目が行って…

そんな話をまさか同じ会社の人から聴くなんて。
「実験映像」という言葉に複雑な顔をする人、小野さん。
今回のゲストは転職した私が出会った映像作家です。

心動交差点とはゲスト作家とシャーマン木村が作品と言葉を交わすことで、会場に波を起こし、ゲストとこの時間「観客」である会場の人々の心を動かすコーナーです。

映像制作のときめきって？



小野雅史作品上映の合間に直球で質問。
コーナー終了後、小野さんに直接話しかけてみてください。丸い眼鏡の奥の鋭

い眼差しを間近で見ることができますよ！

※小野雅史作品をより深く楽しむためのキーワード※

8ミリフィルム 写真 アニメーション リ・フォトグラフィ
FMF(フィルム・メーカーズ・フィールド)⇒福岡を中心に活動する団体。
パーソナルフォーカス⇒福岡発全国上映の8ミリ映画のプログラム。8ミリフィルム3分間(50フィート)であれば、参加自由で無審査で上映。

小野雅史

- 出品作品 ポートレート (1986)
- ポートレート2 (1987)
- ポートレート3 (1988)

《全てシングル8 3分 24駒 磁気2トラックステレオ》

これらは20年以上前、まだ私が学生だった時代に制作した作品です。当時は「リ・フォトグラフィは第2の創造」などと恥ずかしい戯れ言を垂れながら、スチール写真という“平面”をコマ撮りして再撮影することによって、“時間と空間”を植え付けるということに没頭していました。これは、素材となる写真の撮影、その膨大な写真の現像・プリント、そしてアニメーションの計画、最後にそれに基づく再撮影・・・これら4つのプロセスを経てはじめてひとつの作品が仕上がるというもので、今思うととんでもない作業量ですが、当時はこんな作風で制作していた人が多くいたものです。私もそれぞれのワークフローの魅力に取り憑かれたひとりでした。

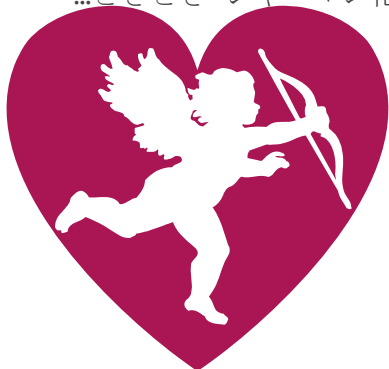
さて今回上映の作品ですが、いわゆるポートレート写真をモチーフとし、その再撮影によって時間と空間を再構成したもので、計3本連作しました。ポートレート写真というのはご存知の通り被写体とカメラマンが関わることによって生み出されるもので、その両者の位置関係の変化を視覚的に表現することを試みたものです。1作目は実質的な処女作で稚拙な表現が多々あり、これを書いている今でも、とても情けない気持ちでいっぱいです。

思い起こせばキャビネサイズにプリントした多数の写真を、深夜放送を聞きながらひとりでこつこつコマ撮りしたわけですが、当時は朝9時までに近所のフジカラーサービスに出すと、夕方には仕上がっている時代でした。その間は教室か学生寮で眠れるので、夕方仕上がりを映写してアニメーション手法を再検討し、次の朝までの撮影にフィードバックできるという、非常に効率の良い制作環境でした。

・・・ところで現在の私ですが、現像から仕上がった8ミリフィルムを映写してみる瞬間の気持ちさえ、もうとっくの昔に忘れてしまった一サラリーマンです。

シャーマン木村 プロフィール

本名木村和代（きむらかずよ）。ビデオグラファー／映像使い
映像は奏でるものだと想う。音楽に作曲、編曲という分類があるのと同じように
映像の作映像、編映像を行う。ビデオカメラの録画時に静かに聴こえるモーター音が、
呼吸と血流のリズムに合わせやすいので作品はビデオ作品。編集している時はオーケス
トラの指揮者になった感じがする。映像を身体に入れると内面から見える世界があって
...ときどき シャーマン化する。



午前2時40分～

Dimension Trip
選ばれし神の子 なごみ

Copyright © 2000 YOO Inc. All Rights Reserved.

毎回違った手法で再撮影を行い、作家独自の世界を作品にして見て頂くコーナー
です。コーナーのテーマはあくまでも再撮影ですが、実はコーナータイトルの
通り異次元への旅へと誘う事を一番のテーマとしています。

さあ、どっぷり浸かってもらいますか...

(お相手 スナミマコト、YOO)

選ばれし神の子 なごみ プロフィール

本名宮崎和海（みやざきなごみ）。1982年生まれ。東京映像芸術学院卒業後、充電期間
を経てハイロにほぼ毎回出品するようになり、昨年夏よりハイロメンバー入り。
特技はレシピを見ずに冷蔵庫に有る物で夕食を作る。弱点は欲望に結構負ける。意外と
負けず嫌いだけど新垣ゆいにはいつも負ける。

Ghostyardというギターデュオで音楽活動も進行中！現在自主制作版が高円寺の円盤
で発売中です。よろしければそちらの方もよろしく願いいたします。

12/3（水）高円寺20000vでライブ致します！

<http://www.20000volt.com/top.html>

円盤

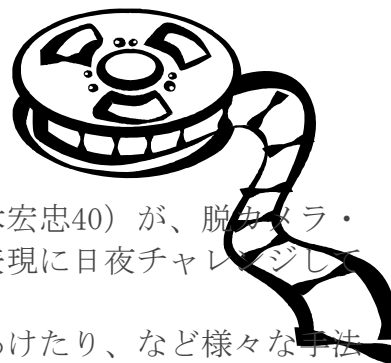
http://www.enban.org/shop/cart_pro.cgi?page_id=1&disp=on&gid=GHO
STYARD

視聴（myspace）



いよいよ・・・さいご・・・ですな♪

午前3時20分～
鈴木研究所
鈴木所長



“鈴木研究所”とは、グラフィック・デザイナー鈴木宏忠40)が、脱カメラ・ノン撮影を出発点にして8ミリフィルムのフィルム表現に日夜チャレンジしている事をプレゼン形式で発表するコーナー。

フィルムに直接削ったり、塗ったり、切ったり穴をあけたり、など様々な手法を用いて、表現の追求とその探究の効果や手法を紹介、フィルムの美しさを伝えていく事が少しでも出来ればと、思います。

8年目の今年は新天地・学芸大学へ向けて新章へのプレリュードです。次回から“売れない漫画家”スナミマコトとタッグ再結成！（お相手 ほしのあきら）

鈴木所長 プロフィール

本名鈴木宏忠（すずきひろただ）。アート・ディレクター／グラフィック・デザイナー。日夜仕事に追われるも、10年前にハイロに観客として常連となり、ほしのあきらの「30歳で作ってる人はやめないよ。」の勇氣ある一言で再び映像制作をはじめ。実際その通りである。

東京都北区のおふる屋（現在は駐車場）に長男として生れる。美大をめざすも浪人中に映画にハマってしまい“東京映像芸術学院”卒業。が、デザイン・広告に熱烈に興味をいだき、グラフィック・デザイナーとなり19年たつ。ハイロには98年に入団。ハイロのチラシデザイン担当。鈴木研究所所長。最近、ワンコを飼いました。

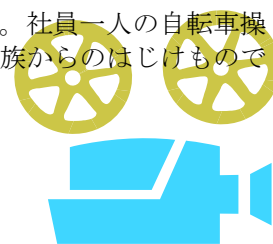
今日の映写係

YOO

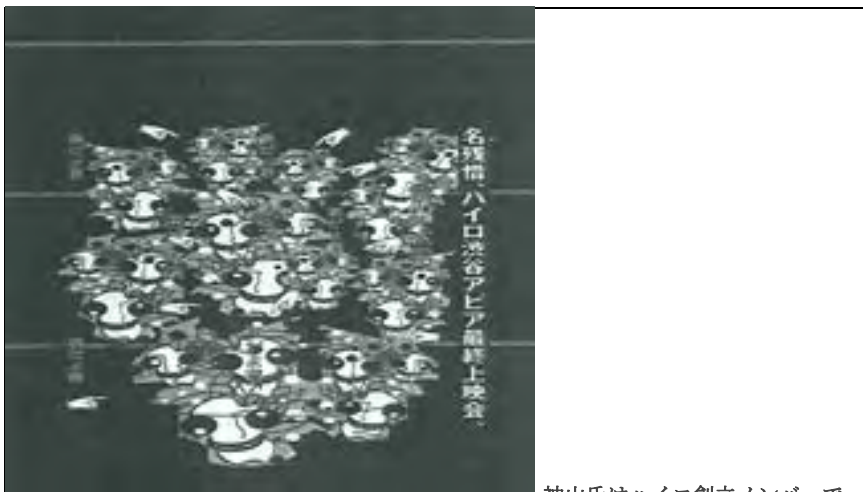
学生の頃は毎回映写係。小さな覗き穴から観る映像にワクワクした。昔のフィルムは燃えやすいニトロセルロースだった為に映写技師認定証を取得して16ミリフィルムを映写した。今は丈夫なアセテートやポリエステルに変わり免許はいらない。フィルム、テープにDVDと映写係は重大任務だ。

YOO プロフィール

本名柴田容子（しばたようこ）。YOOカンパニー代表。100年の不況。社員一人の自転車操業でも少しでもいただけるお仕事は大事にやり遂げます。おやし扱いの家族からのほじけものですが、家族の協力があってこそその母を連日頑張っています。



ハイロはこのように、メンバーそれぞれが映画について考えることを形にして提示します。そのパッケージに個性と魅力があるか、話し合いを繰り返しています。興味のある方はメンバーになって自分のコーナーを作ってください。パッケージについての不満、励まし、意見などあれば、どうぞフリースペース欄にあるメールでお願いします。



神山氏はハイロ創立メンバーで、同時にヘアー設立メンバーでもあります。この絵はマウスを使って手描きで描いています。

アピアは1970年、スペース・ラボラトリー・ヘアーとして生まれ、舞踏・演劇・映画・パフォーマンス・その他多くの表現の実験工房として、アンダーグラウンド文化を育てて来ました。近隣からの苦情や内容に対する体制の抑圧に抵抗しながら、経済的な圧迫から仕出し弁当やパーティ会場としての別の顔を持った時期も経て、丸39年。ずっと〈これからの表現者〉に目を向けた場であり続けています。新たな地での再開は抗い続けるアピアの展開と発展でもあります。寄生虫ハイロも同様であらねばなりません。よろしくお見守り下さい。

神山昇

あれからズット
しりとりをしていた……

……ヤ……
山松ゆうきち、
カサカサした漫画、
年増のストリップパーの
リアリティーが
やたら面白い……の……
イツ。

……イ……
いいけど
バロン吉本の
スポコンじゃない
すねた笑いも
すぎだなあ……
のナツ。

……ナ……
なあ、おまえ
一晩中走りつ
ぱなしだぞ

おっつ！
日本海に
でちゃった！

この海の
先が韓国、
中国、ロシア
中東、
ヨーロッパか
……

日本海を背に
このたくましい
雑草の影を
撮るぞ！

日本海が
見たいって
言つてたのに
それは
撮らないんだ。
結局……

あたりまえ。
……アツ……
フィルムが無く
なった……クソツ



特集 〈ハイロの元気はどこにある？〉

1970年10月から続いているハイロ。活動している人は変わっても今年で40年。そのエネルギーはどこから来るのか？あなた達の活動のエネルギーはどこから生まれるのか？そして、その元気をお客さんにどう手渡そうとして、どのくらい受け取ってもらっていると思っているか。(☆)

● ハイロを続けている力はどこにあるか ハイロ代表 大房潤一

端的に言ってしまえば「映像」です。

映像が面白くなければそんなに長く続くわけがありません。

集まる作品や人が面白いから映像的な刺激や発見があり、だから何とかやってこられたのではないかと思います。

で、なぜ面白い作品が集まるのかというと、

まず面白い作品の集まる磁場のようなものがあるからともいえます。

メンバーの個性や企画、そして個性的な観客も交えた場こそハイロなんだと。

ただ、これではちょっとありきたり。

「場」の力だけでは何十年も持たないですね。

そこでもう少し考えてみると思い当たるのは、一見矛盾するようですが、ハイロの力は基本姿勢の「無差別無審査」にある。です。

矛盾するというのは、面白い作品は主催者側がセレクトして観客に提示するもので、ハイロの基本姿勢はそうではなく「ミソクソー緒」という状態です。

それではつまらない作品も上映せざるを得ませんし、「外れの日」も出るかもしれません。しかし、この面白い作品ばかりでないところが、実はすごく面白いのだと思うのです。

ちょっと話は飛びますが、ヨーロッパの美術館に行ってみると、日本と違って一流の美術品ばかりでなく二流三流のものも並んでいます。それは当たり前で、その国の美術作品を並べていったらレベルはバラバラになります。

それに対して、日本にわざわざ持って来て行う展覧会は「良い」作品ばかりです。

だから初めてそういう美術館を見ると、日本でルーブル名品展なんかに行った時とは違う感じがします。

ちょっとがっかり、という感じでしょうか。

でもそれは反対で、選ばれたモノばかり見ていると、それは何も見ていないことかもしれないなくて、いいものもよくないものも全部見ることで、その時代の雰囲気やリアリティをるかむことができると思うのです

だから無差別無審査という、この何でもウェルカムなところが実は映像の可能性やいろんなことを映していて、それがパワーにつながるのではないかと思うのです。

あと、私があまりきっちりしたものが好きではなく、だらしない感じが好きだからというのがあります。外れの日＝オマケの日という感じです。



● 何もしないと何も残らないからいつでも元気でいたい！ 柴田蓉子

学生の頃張り切っていたハイロの活動も、食べる為の仕事と両立できないという平凡な理由で辞めた。会社員生活、出産、子育てといろいろな題材はすぐ傍に転がっていたのに、ハイロの活動が出来なかったのは、後悔の時間だ。結婚しているとか、子どもがいるとか、共稼ぎは芸術畑の中や業界では、タブーだと思っていた。フリーになってからは、出産を隠すのが大変だったし、子どもの事や家族の事はこの次になり、「他にも代わりはいるから。」とプロデューサーに言われて仕事を失いたくないから、未婚だと偽って仕事一筋に徹した。たぶんハイロだって、芸術家の集まり。家族や家庭を見せてはいけないのかもしれない。よく思わない人がいるに決まっている。そうも思ってきた。

3人の子供の母と円満な家庭と仕事を両立している照明デザイナーの石井幹子さん。私が私生活を隠していた時、「世界各国、家族を大事にできない人は、仕事も大事にできないし、女性は結婚・出産の経験を生かしていい仕事に飛躍しますよ。」と家庭を持つ事を薦められた。「実は家庭があります。4人子供がいます。隠していないと仕事が来なくなります。イメージが悪くなるから。家族がいるなんて言えません。」と言うと「あなたの家族があなたを元気にしてくれているはずよ。私は家庭を持って子育てしながらだって仕事ができる人ですと、胸を張りなさい。」と励まされた。

去年、再就職の話があった。「家庭があるからできません。」と断った。フルタイムの会社員はもう出来ない。迷惑をかけることになるからと付け足すと「家庭を持っている人の経験で母の目で企画して欲しい。」と言われた。子育てや家族の経験を重んじてくれるなんてすごく嬉しい。今は、社会の考え方が少しずつ変わってきて、少子化問題と合わせて子育て中の女性を少しだけ応援してくれるようになった。お母さんになっても

プロの仕事人として向かえてくれる若いプロデューサーも増えたが、現実には家庭と仕事との両立が難しい。下の子供が18歳になるまで、あと6年待ってもらえますか？とお願ひした。そんな先まで解らないよと言われた。

日本がこんなに少子化になったのは、家庭のある女性に仕事ができるわけがないという社会の目があるからだ。仕事を優先してきた私は家族旅行だって、三者面談だって忘れてしまったり、行かれなかったり、家族サービスどころか家事をこなすのがやっとだった。自分の生活で精一杯。子供や夫の面倒なんて考えられない。愛人生活や、新婚ごっこで充分などと言う女性や男性が多すぎる。結婚した女性が片手間で社会に席を置いてもらいたくないと思っている人が多すぎる。

そんな土壌で両立なんて無理だ。

親になると人間が良く解るし、すごく成長する。視野が広がる。私のような不良に「子育てと家庭で人間を勉強しなさい。」と神様が使命したと思っている。失敗の連続だけど、実戦で学んだ事は大きい。何とかして家庭や子育ての経験と自分の才能を生かして両立できないかと考える。時間が無いから出来ないのではなくて、時間をどうやって使うかだ。

私が学生の頃のハイロのメンバーは、ほしのさんと大房さんを残して入れ替わった。先輩達はどんな理由でハイロを離れていったのだろうか？私は出もどりハイロ。育った実家でもう一度張り切ってみたい。私の映像作りが、ちぎれた時間で分断されたのは家庭を汚名にしてきたからだ。ハイロは人間が生き残ってきたプロセスを認めてくれるような気がした。新しいアートや音楽が歳をとっても受け入れられるのは、子供達の感性がすぐ隣にあったからだということに気づいた。パッション溢れる私の家族を土台にして自分を構築し直してみたら、私だけの年輪が表現できるかもしれない。

そんな可能性と自分の感性と芸術性を信じれば、遍歴を形にして確かめられる気がしている。ほしのさんが私に元気でいられる映像の自信をくれたから、作りたい気持ちを支えられると思う。ハイロは、勢いのある作家はもっと元気に、疲れた作家は元気な光をたくさんくれる日向の安息場所になる。

それは、私だけでなくハイロの扉を開ける人全てに感じられる元気なエネルギーだ。

●元気の基は、憧れと嫉妬。それを超える時まで マエダシゲル

勘違いしていた。85年のシネマフェストがハイロとの出会いを決定付けたと思っていた。けど違っていた。それは、84年の特別企画「生きているから映画と出会った。①働きながら映画を作っている人達 VS 働きながら映画を作っているハイロの人達。②今気になる人。③札幌ニューパワーVS 若手ハイロ」という2月の5日間に渡る特集上映だった。当然、毎日通った。病院受付のお姉さん、教師、主婦、営業マン、金属造詣師、デザイナー、マグロ直販業、建築業、建具職人、会社員、フリーター。津軽海峡を渡って山崎幹夫さん率いる北海道映画がなだれ込んできていた。大学の映研はもとより高校生も当たり前のように映画を作り、高校時代に8ミリと出会えなかった私は嫉妬して羨望した。制作費も1500円から20万円と人それぞれ、製作日数も半日から3~4年と作品それぞれだった。「あなたにも作れます」というコピーに苦笑してしまうくらい、作りたいなら作れ、やってる奴はやってる。映画を作るのに縛りなんかない、どんな環境でも作りたい気持ちがあれば作れるでしょう、と言っていた。

なによりも、高校の進路相談の時、「映画を作りたい」と相談したら「馬鹿、映画は大島渚のように京大のトップ出じゃなければ作れん、堀越風情が身の程をしれ。」と。それは、確かに一般社会通念として正しいに違いない。実際私はTV局の仕事に耐えられず辞めてしまったのだから。でも、一言「8ミリやるか。」「ハイロに行ってみろ。」と、何か活路を見出す言葉があれば。・・・あの暗い3年間を返して欲しい、いや戻りたくない、と怨む気持ちも31年の時の流れに薄れたものの、進路相談のコンプレックスと、この上映会の挑発と刺激が重なって、それが私の根幹の底の力になっている。

持続は力というけれど、ともすれば撮ろう・作ろうに拘泥しもがいていた。多くの作家に出会った。羨望は尊敬に、尊敬が嫉妬に、嫉妬が焦燥に、変わる。好きなればこそそのエネルギーなのだが、インスタントに形式だけを追い求め積み重ねる。手軽く手早くうまくはなるが、自分がなにをやりたいのかやろうとしているかを見失う。本当は自分が何をやりたいのかが自覚できていれば、下手でも失敗でも、その根幹にある自信が伝わるはずなのだ。それを積み重ねられればよい。正直、見ていましたかではなく、認めてほしいと観客に甘えて媚びている。

見失っていた。見苦しいほどに映画が好きだという気力、その身勝手な藁にすがりながら逡巡して25年、やっと「出張クラブ」にたどりついた。自力でなくハイロの仲間を示唆されて。そしてそこは、25年前に挑発と刺激を受けた、働きながら映画を作っている人達、自分がその人になって、そこに戻ってきたといえる。「働きながら映画を作っている人達」という特集に最初に出会ったのは、偶然でなく必然だったのかもしれない。遠くの憧れより足下を見よう。そこに映画がある。抗うことなく受け入れよう。そう決めた。それを、自分の映画と言葉で伝えよう。

ジョナス・メカスの映画日記が再販された。1959年2月4日から書き始められるこの日記を起点にしても、個人映画の歴史は50年。ハイロが40年。個人映画を生き抜いた人もそうはいない。まだ、始まったばかりだ。

● だらだらした情熱

鈴木所長

ハイロの持続の活力の源は、「だらだらした情熱」ではなかろうか。

ここ何十年かでメディアも急激に変化してアングラ志向や主義も変化している。もちろん根底にあるパワーは同類項なのだから70年、80年台に表現に目覚めた人達と意見の交換が出来るわけだが、いつの時代にも反正当派と言うか反発精神と言うものは気持ち良いぐらい熱いものがある。

ハイロの持つエネルギーは一過性のものではなく、「だらだら=大河的」なものである活動している人が変わっても40年も続いているのはその精神を引き継いでいるからではないだろうか。

表現にこだわって、映像作品を作って第三者とコミュニケーションをとるのは、作家としてごく当たり前で当然のようだが、『難しい』と気がつくとなかなか腰を上げるのが大変である。学生の頃の友人としゃべっていると、未だに作品をつくりたいうぬんと、その手の会話になる。ハッキリ言うけど作っている奴は、つくりたいなんてぬかさないヨ。

やって当然、誰かに言われたから作ってるんじゃないんだヨ。

思考を形にするっていうのは、己の心の情熱が表現につながるわけで、それが第三者にとってどんな風に伝わるのかは、作家の情熱しだいだと思う。勇気や元気を伝えるって難しいけど、でも実は簡単な事だと感じます。

鈴木研究所の30分で『何か』にスイッチが入っていただけたら万々歳です。

40歳のオッサンが、普段の規制された生活の鎖を8mmフィルムを通して己の情熱をきざむ姿を皆様にさらけ出して、制作活動に、少しでも可能性や参考になっていただけたら、それが明日の反発精神そしてハイロ精神につながっていくはずである。

社会や会社の規制より自分で作ったルールの方が、いかに自由で

そして相当に困難な事である。(本当) ハードルの高さにもよりますが・・・

僕は少しずつ上げて行ってマス。

若さって何だ、ふりむかない事さ

愛って何だ、ためらわない事さ

あばよ涙、よろしく勇気

●活動の源 について

スナミマコト

いい映画を見たあと、胸の奥がうずうずしてくる。映画だけでなく、いい絵を見た時、音楽を聴いた時、いい天気の日自転車ですら進んでいる時。胸の奥がうずうずしてくる。これは心臓の動きだろうか？

感動するという事を言葉にするのは難しい。でも実際に身体には変化が起きている。レントゲン写真で身体を透かしてみても、このうずうずを説明するのは不可能だろう。でも確かに存在しているものがある。自分の身体の中に「目には見えないもの」が、確かに存在しているのだ。

これが『心』というものだろうか。

しかし「目には見えないもの」をどうやって説明すればいいのだろうか。なにせ「目には見えないもの」なのだから。やはり、「目にみえるもの」で説明するしかないようだ。それが『表現』というものだろうか。

ということで、『表現』の前には『心』の動きがあって、『心』の動きの前には、『心』を動かすものがある。そしてそれは「目にみえるもの」である。

では『表現』の後には何があるのか？『表現』とは「目にみえるもの」であるから、その後にくるものといえは...

映画作りは自分是对話だと思う。ドキドキしたり、悩んだりする事が人生を豊かにしてくれる。また映画作りは他者との対話だとも思う。自分から動かないと、何も生まれない。でも、うまくいく事ばかりじゃないね。

僕の作った光と影は人にどんなものを見せているのだろうか。中村タケヒロ君は何か感じているだろうか。浅場さんはどうだろうか。塩野谷君はどうだろうか。井口君はどうだろうか。

何か感じてくれているといいな...



● 甘い考え

ジャーマン木村

作品を作って上映する。それはとてつもなく甘い考えで、「作る」と「上映する」ことはそれぞれ違ったエネルギーが必要で、それに対しての自己責任というか、問題が山ほど発生する。

この年になってもまだ上映という締め切りがないと作品が作れない私は、「上映する」という場に対しての甘えで身を削りながら作品を作れている。

とはいうものの、ここ数年は上映会を企画したりパフォーマンスをやったりと、ハイロ以外の場でも身を削ったりしていて、「じゃ、ハイロって何なんだ？」と改めて自問自答すると、自分以外の方が同じ時に映像で何かやろうとしていることが、同じ時間に体験できる場、なんだと思う。

情報としてインターネットや雑誌で映像についての試みを手にしても、個の時間に発生したこととして、あまり身体に入っていない。

その点、ハイロの会場で体感することは、血を揺さぶられる。明らかに共振している。

音楽を聴いていていろんなことが感じられるのと同じように、映像の時間を身体に吸い込んで、感覚を呼び覚ますことは意識しないとなかなかできない。

おもしろいつまらないの判断ではなくて、同じ場所に作った人がいる方が映像をより受け止めようとする。

ハイロの上映会では作った人からの刺激もあるという甘い考えが私の新たな制作へのエネルギーとなっている。

すべては甘い考えがエネルギーの源なんだと思う。



●活動の源 について

宮崎和海

担当するコーナー‘Dimension Trip’は再撮影をテーマに過去3回上映してきました。何で再撮影なのかと言うと僕がメンバー入りし、コーナーを持つことになったんですが、これと言って自分から何がしたいと言う事がなく、だんまりを決め込んでいたら、ほらのさんから「再撮影は？」と言われ、そのまま自信もなく、始めたのです。

当然のごとく今まで当たり前になっていた再撮影と言うものを「意識」するようになり大切なものが遠く自分の外に出ていったような不安だらけでした。考えても答えが出ず、あげくに行き着いた答えが『とりあえずやってみる』！

毎回違った方法で再撮影をしているんですが、いつも考える前に『とりあえずやってみる』です。

何とも恥ずかしいことですが、考える事が昔から苦手でした、今まで考えてから作ったことがありません。当然失敗だってあるし、あとあと後悔する事だってありますが、なんとかやってこられました。

今までやって来た方法も全て考えて出来たものでは無く、手を動かし、失敗したりしながら出来たものです。でも、再撮影というものが苦になったり、自分自身が再撮影に縛られたりすることも無く、良い関係を築けています。

過去3回のDimension Tripもコーナーを見てもらったお客さんにやり方とか再撮影を考えてもらおうなんて考えてません。やはり作家としての勝負なんです。面白いかどうか。そこなんです。

Dimension Tripと言うコーナー名の通り映像の中に入り込んでいってほしいと言う自分なりの裏テーマがあるんです。過去のDimension Tripで少しずつですがお声をかけて頂いて、引き込んでいけるのかなとは思っています。

興奮した様子で『すごいねえ〜』『やばいねえ〜』なんて言われたいですし、そこから始めて、そこをもっと成長させていく事でコーナー自体の色も付くものと思います。

このフェストで今年度のハイロが終わりますが、これから先のDimension Tripも作家自身が体感した旅をより多くの皆さんにも体感してもらえよう頑張っていきたいと思います。



Dimension Trip

次号から誌面一新！の予定

うじうじ日記

神山昇

「タンが喉につかえています。吸引機で取れ切れません。タンにニオイがあるのは肺が炎症を起こしているということです。特に延命処置はしないと伺っていますがそれでよろしいのですね。念のため確認です。…覚悟しておいてください。できれば連休は遠出なさらない方が…」と父のかかりつけの医師から電話があってから10日がたった。父が認知性となり、ケアセンターに入所して3年、数えるくらいしか面接に行っていない。薄情かもしれないが、そこにいるのは父の顔をした違う物だ。あの父は3年前に既に僕の中では死んでいる。実は早く亡くなってくれと願っている。呼吸をしているし、生命の尊厳というが、そこには意志がない。当初は実は意志があって僕に何か伝えたいのではないかとかすかな期待をしたこともあったが…うつろな目と乾いた呼吸だけである。いま、死亡通知を待つ毎日は辛い。そして、通夜、葬儀と続く儀式の手配、自分の仕事を中断する段取り…億劫であり早く過ぎて欲しいのである。

むかし、映像作家集団ハイロの頃、上映会のポスターを電柱に貼っていた仲間がパトロール中の警官に見つかった。僕は捕まらずに済んだ。日芸でデモをしていたとき、投石で友人が捕まったが僕はうまい具合に逃げ切った。渋谷スペースラボラトリー（渋谷アピア）で五月女幸雄の現代アートの個展があり、公然わいせつ罪で照明を担当していたアピアのマスターが他のスタッフと共に捕まった。が、僕はその場を離れていて難を逃れた。当事者でありながら、いつも外側にいたのだ。渋谷アピアが移転する。しかし、僕はすでに当事者ではなかった。

瞬刊ハイロの現編集長☆の氏から、時々「やくざ映画」の観劇案内メールが来る。僕がそれを好きなことを知っているのことで。その気になれば行けなくもないが仕事を言い訳に未だ参加したことがない。間接的に「映画つくれよ」と言われている気もする。なぜなら、あの頃「やくざ映画」を共に24時間ぶっ通しで見ていた頃が映画づくりに励んでいた頃だからだ。この年になってもまだつくれるのだろうか？

「やっぱり猫」という☆の氏の作品で撮影を担当したことがある。東京板橋の成増の排水用水路で三脚を立てた。あの時の逆光シーンは自分で言うのもおこがましいが、本当に美しかった。二度と撮れないだろうが、あの時の気持ちは忘れようもない。



はい

お知らせ

○次回は 7月17日 (金)

ケツがいてえぞ！オールナイト

フリースペース→参加自由の発表の場

心動交差点→ビデオシャーマンが未知の作家と遭遇

出張クラブ→映画と日常、どう絡めるか。

鈴木研究所+フィルムピクニック→カメラ使わず頭と手で映画を探す。ぼくも作る！君も作れ！

Dimension Trip→ウォー、再撮影だ、ウォー
もちろん、新コーナーも待機中、忘れちゃならない。

アピアは APiA FORTY 新しい空間作り

お邪魔虫ハイロも何かが変わる？どっちにしても

偉大なマンネリ！ハイロは進む

<http://www.hairo.org/>または 上映集団ハイロで検索を。

瞬刊ハイロ 編集後記



やっぱり、元気は勝負をかけなくちゃ

6代目編集長 ほしのあきら

ということで。終わりました今月のハイロ。恒例のファミレス反省会も最後です。そんなことより渋谷のアピアが最後、です。39年間、私の人生の半分以上です。繰り返して、凄いもんだけど結構気がつけば・・・なんで大したこと無い気もしますが、やっぱりここが無くなるっていうのは感慨深いものです。淋しい、そう淋しいですね。とっても。ありがとう渋谷アピア、それしかないですね。正直、新しい場所でやっていくのは不安です。だから楽しくやりたいです！

さて、少し前のことですが WBC (だったかな?) に夢中になりました。子どもが中学生の頃までは高校野球に夢中だったんですが、それ以来の興奮でした。特に決勝戦のイチローのシーンは映画だったら“ウソおーっ”ですよ。もちろんイチローカッコいいんですけど、相手のピッチャーにしばれました。だって敬遠でしょ? ベンチのサインだって敬遠だったはずですよ。

でも・・・でも・・・勝負したんですよ。(ピンクレディの『サウスポー』って歌知ってます?) まさに映画ですよ! まさに WBC の彼らは、あの時アマチュアですよ!

プレッシャーって凄いもの生み出すんですよ。慣れの仕事はいけません。新鮮さを生めないし、緊張感を運べません。プロの仕事がおおた安心なのはお金のためにやってるから。でもプロがアマチュアになると、とんでもないことを生んでくれる。映画が心に刻まれる時ってそういう時ですよ。

このアピアでハイロが初まったとき、映画もどきの作品には凄い野次が飛びました。嘲笑が起きました。過激で新鮮な作品には拍手が起きました。司会をやっていても、誰も寝ないし帰らないし、どうなるか分からない緊張に包まれていました。自分の作品の上映なんて、ホント死ぬ思いです。観客もアマチュアばかりだってことですよ。

もちろん、観客をアマチュアにしたのは作品だし、ハイロなんですよ。

いま上野でルーブル美術館展が疲れるだけなのも、大房さんが特集で書いている通り、まともにいいものばかりで客がアマチュアになれないんですよ。神山君の表紙もマウスで手描きなんてアマチュアですよ。その力が伝わりませんか? ハイロの元気、もっと考えたいです!

私の編集も手慣れてきたので、なんとかアマチュアにかえります。 また。

